

# あなたの世界

大沢ケイト

## 登場人物表

進藤	由夏（40）	デイサービスの職員
進藤	湊（14）	由夏の息子
松嶋	リサ（14）	湊のクラスメイト
進藤	真（43）	由夏の夫
深澤	亮（32）	湊の中学の教師
高遠	幹人（40）	由夏の元カレ
田中	時枝（89）	デイサービスの利用者
三好	みなみ（26）	湊の中学の担任
進藤	成子（68）	真の母
児玉	佑美（39）	由夏の友人
大木	奈津（40）	由夏の友人
木本	かなえ（51）	デイサービスの職員
インストラクター		
デイサービスの利用者	A	
デイサービスの利用者	B	
合唱部員	A	
合唱部員	B	
二年二組の生徒		
合唱部の生徒		

## あらすじ

進藤由夏（40）は偶然、元カレの高遠幹人（40）に再会し、胸をときめかせる。由夏は中学二年生の湊（14）と二人暮らし。デザイナーサービスの職員としてフルタイムで働いている。由夏と湊の父・真（43）は別居中。湊は学校を休みがちで高校にも行きたくないと言い出し、由夏と喧嘩になる。湊の趣味は年季の入った漫画を繰り返し読むことだった。湊はずっと父に「帰ってきて」とメッセージを送っていた。何かと身体を触る去年の担任・深澤亮（32）を毛嫌いしている湊に、クラスメイトの松嶋リサ（14）が突然漫画を貸してくれと言う。急速に距離を縮めてくるリサに湊はときめく。深澤が悩みのため、ある日、リサが深澤に向かって給食の残飯をぶちまけ、手伝った湊も巻き添えで出席停止処分になる。謹慎中、湊をたずねてきたリサは深澤先生が好きだったと衝撃の告白をする。リサが気になってい

た湊だが、自分が深澤と親密だと誤解したり  
サが自分に近づいたのだと思えば落胆する。リ  
サと湊は口論になり、体調不良で帰ってきた  
由夏に見つかったりリサは追い出される。湊と  
由夏も険悪になる。コロナ陽性の由夏は湊の  
看病のおかげで元気になるも、湊との溝は深  
まるばかり。湊は由夏の世話をやく高遠も気  
になっていた。ある日、深澤に襲われそうに  
なった湊は父・真に打ち明け、母には言わな  
いよう口止めをする。「自分が湊と暮らす」と  
真に提案された由夏は動揺。由夏は湊の宝物  
である漫画を捨ててしまい、湊と大喧嘩にな  
る。家出した湊はリサにこの漫画が家族の思  
い出であることを打ち明ける、湊は警察に保  
護され、由夏は反省し、湊は自分ではなく夫  
と暮らすべきだと悩みながらも決断する。湊  
は自分が父親と暮らした方が由夏は高遠と  
一緒になれると考える。湊は由夏が寝込んで  
いるとき、彼女が死んだときを想像して泣い  
たと由夏に告白する。由夏が死なないと、自

分はいい子にはなれないと呟く。思春期の狭間で悩む湊に誰と住むかあんたの好きになさい、あなたが住む世界なのだからと由夏は言う。湊は由夏に電話をかけてよこし、自分の好きなものを教えようとするのだった。

(終)

○デイスリーブス「あおい」・前  
宅配の車が停まっている。

○同・入口

進藤由夏（40）が印鑑を持ち、宅配のユニフォーム姿の高遠幹人（40）と話している。

高遠「全然変わらんやん、澤井。あ、澤井ちやうか、えっと」

由夏、エプロンの名札を見せて

由夏「進藤。高遠くん、この辺の地域、担当なん？」

高遠「最近変わってん」

由夏「せやろ、今まで会ったことなかったもんなあ。あ、ごめん。ハンコやな」

由夏、伝票に印鑑を押す。

高遠、笑顔で伝票を渡しながら

高遠「これから仕事の楽しみ増えるわ、澤井。あ、」

由夏「澤井でええよ。どうせもうすぐ名字もとに戻るし」

由夏、高遠をまっすぐ見る。

タイトル

「あなたの世界」

由夏、帰っていく高遠に手を振る。

うれしそうに仕事に戻る。

もう一度、高遠が出て行った方を見る。

2

○湖・全景

佑美の声「なにそれ、最高やん」

○同・湖上

SUP（サップ・ボードの上に立ち、漕ぐスポーツ）をしているグループ。

ボードの上でパドルをあやつる児玉佑美（39）と大木奈津（40）。

佑美 「昔の彼氏に再会するなんてドラマやん。ドラマの世界やん」

奈津 「ほんまやで。うらやましすぎるわ。私らにもそんな出会い欲しいよなあ」

佑美 「奈津には彼氏おるやん」

奈津 「誰のこと？」

佑美 「誰のことって」

奈津、うなずいて

奈津 「もう別れてん」

佑美 「もう？ まだ付き合ったとこやん」

奈津 「もう新しいのがおんねん」

佑美 「どいつもこいつも。腹立つ」

奈津 「佑美にはちゃんと旦那がおんねんから

ええやんか。安心安定が一番やで」

佑美 「いやや、新しい恋がしたい」

奈津 「無いものねだりやな。佑美、待って。

由夏がまだついてきてない」

後ろを振り向く佑美と奈津

×

×

×



ボードにつかまり湖水から顔を出して  
いる由夏。

隣にインストラクター。

インストラクター「大丈夫？」

由夏「落ちてばかり。もう嫌！」

インストラクター「がんばりましょう」

渋々、ボードに乗ろうとしてひっくり

返る由夏。

由夏「もうイヤ、向いてない」

インストラクター「大丈夫、大丈夫。落ち着  
いてしたら大丈夫ですから。人生と一緒に  
ね、焦らずゆっくり行きましょう」

笑顔のインストラクター。

由夏「人生。沈みっぱなし」

水に沈む由夏。

○湖畔（夕）

並べられたボード。

バーベキューをする由夏、佑美、奈  
津。

佑美「そういえば由夏って、旦那と別居して  
たのどうなったん？ 離婚したん？」

由夏「まだ」

奈津「真くん、戻ってきたとか？」

由夏「戻ってなんか来うへんわ。あちらのば  
あちやんと仲良く住んではります」

佑美「もう真と別居してだいぶ経つやんな」

由夏、考えて

由夏「二年とちよつとかな」

佑美「もう謝ったら。元々、由夏がキツイこ  
とばつか言うから喧嘩になったんやろ」

由夏「絶対イヤやし」

佑美「じゃあ別れたら」

奈津「離婚したら今のマンションどうする  
ん？ ファミリー向けやろ。売るん？」

由夏が答えるより先に、佑美が口を出  
す。

佑美「ローンもあるし。売らなあかんやろ  
な。息子はどっちについていくん？」

由夏より先に奈津が

奈津「そら、お父さんやろ。湊くん、めっちゃお父さん子やったもんな」

佑美「そっかー」

由夏、憤慨して

由夏「ちよつと待って。あたし抜きで話進めんといて。湊がどっちについてくかってそんなんあたしに決まってるやん、まだ中二やで」

佑美と奈津、顔見合わせて黙る。

由夏、ムツとした顔で耐ハイを開け

あおる。

由夏「あー、明日も仕事や」

○H市・全景

京都と大阪の県境・H市。ベッドタウン。

○道（朝）

自転車を漕ぎ、通勤・通学の人々の間を抜けていく由夏。

○H市駅・自転車置き場（朝）

由夏、自転車から降りると鍵をかけ、歩いていく。

○H市駅・バス乗り場（朝）

停留所に制服姿の中高生や通勤客が長い列を作っている。

バスが次々発着する。

バス待ちの列に並ぶ由夏。

○走行中のバス車内（朝）

混んでいる。

由夏は揺れに耐えながら電話をかけている。

○由夏のマンション・全景

中規模マンション

○由夏の家・玄関前

マンションの一室。表札に進藤真・由夏・湊と書いてある。電話のコール音。

○同・和室

布団にくるまった進藤湊（14）がぐっすり眠っている。隣で鳴り続けるスマホ。

○走行中のバス車内（朝）

スマホを耳に当てながら由夏、由夏「あのアホ。まだ寝てる」

○湊の中学校・全景

○湊の中学校・二年二組教室・内

深澤亮（32）が英語の授業をしている。

教室の後ろの扉からこっそり湊が入ってくる。

深澤、湊に目をやり、ニヤツとして授業を続ける。

湊、席につきカバンから教科書を出そうとする。背後から男子生徒が叫ぶ。

男子生徒「先生！ 進藤くんが遅刻してます！」

教科書を取り落とす湊。ヤジが飛ぶ。

深澤「静かに。進藤、遅いぞ」

湊、教科書を拾う。

後ろの席から松嶋リサ（14）が湊を見ている。

○ デイサービス「あおい」・外観

○ 同・食堂

由夏が利用者Aの食事介助をしている。

立ち上がった利用者Bに

由夏「小森さん、トイレ？ ちょっと待ってついていくから」

木本かなえ（51）が利用者Bに向かい、

木本「私、行きます。小森さん、一緒に行きましようね」

由夏、利用者Aに

由夏「夏木さん、もういい？ もう食べないの？ もう少し食べようか。お腹すくから」

あーんと利用者Aの口元にスプーンを運ぶ由夏。

○湊の中学校・二年二組教室・内

昼休み。給食を食べ終わり食器を返却する生徒たち。

給食係が残飯の容器を運んでいる。

湊は机で古びた漫画を熱心に読んでいる。

湊を観察するリサ。

○デイサービス「あおい」・入口（夕）

由夏が帰り支度をして急いで出てくる。

由夏「お先に失礼します。お疲れ様でした」  
外から戻った木本が声をかける。

木本「もうお帰り？」

由夏、笑顔を作り、

由夏「子どもの三者面談なんです」

木本「三者面談か。お子さんおいくつ？」

由夏、仕方なく足を止め

由夏「中二です」

木本「魔の中二やね。男のお子さん？」

由夏「はい」

木本「あー男の子かあ」

由夏「(遮って) すいません、ちよつと」

職員、気がついて

木本「ごめんね、気いつけて」

由夏、笑顔で

由夏「お先に失礼します」

真顔になり急ぎ足で歩き出す。



○ 走行するバス・内（夕）

バスの車内。

由夏は椅子につかまり立ち、揺れに耐えながら腕時計を気にしている。

由夏「早く早く。遅刻する」

○ 湊の中学・二年二組教室・内（夜）

三好みなみ（26）に向かい合い、由夏と湊が座っている。

由夏、驚いた顔。

由夏「え」

みなみ、困った顔。

みなみ「ええ」

由夏、湊を見る。

湊、黙って首を回している。

由夏「湊、どういうこと？」

湊、返事をしない。

由夏、カッとなって

由夏「何アホなこと言うてんの、あんた。高  
校行かんって」

湊、黙っている。由夏、いらだって

由夏「ちゃんと説明して」

みなみ「お母さん」

由夏「(落ち着こうと)すみません、先生。

(すぐに)湊！」

由夏、机を叩く。びくつとなるみな

み。湊、ため息をつく。

湊「もうほんま嫌や。すぐこうなる」

みなみ、焦って

みなみ「お母さん、少し落ち着きましょう

か」

由夏、みなみの言葉に耳を貸さず、湊

に

由夏「高校も行かんと何になるんや」

湊、黙っている。

由夏「何とか言いなさい！」

湊「まだ考えてへん」

みなみ「おかあさん、おかあさん。落ち着い

て。進藤くん、何か考えがあるの？ 高校

行かないって本気なのかな？」

湊「本気です」

由夏、大きなため息をつき、イライラする。

由夏「こういう訳のわからんこと言うの父親そっくりや」

みなみ、何とか進行しようと

みなみ「進藤くん、絵を描くのが好きですよ。なぎの高校は美術に力を入れてるよ」

由夏、心外だという顔。

由夏「先生、絵なんかやっても食べていかれへんやんか。無責任なこと言うのやめて」

みなみ「すみません。でも少しでも湊くんが高校に興味持ってくれたらいいなって」

湊「いいです。行かへんし、高校。高校出てもろくな大人にならない見本がここにいますから」

湊、由夏を指さす。

由夏、立ち上がる。

由夏「高校いかずにどうするつもりなん」  
湊「さあ」

由夏「はあ？」

湊「働く」

由夏「（鼻で笑って）あほ。中卒の、何の取

り柄もない子どもをどこの会社が雇ってく

れんねん」

湊「そんなの探してみなわからん」

由夏「探したんか！」

湊「まだや。まだ中二やろうが。死ね」

由夏「何て言った。今なんて言った」

湊につかみかかろうとする由夏を止め

るみなみ。

みなみ「おかあさん、落ち着いておかあさ

ん。進藤くん。死ねはやめよう」

由夏「親、バカにすんのもいい加減にしい

や」

湊「馬鹿丸出しやんけ」

由夏と湊、つかみあう。

みなみ「湊くん、お母さん。落ち着いてくだ

さい！ もう一度お家でご家族で話し合っ

て。ね。お父さんのご意見も聞いて、家族でね、家族で」

由夏と湊、みなみを見る。

由夏、ひんやりとした声で

由夏「うち、お父さんいてないんで」

みなみ、ハツとした顔。

○同・職員室・前（夜）

職員室のプレートがかかっている。

○同・同・内（夜）

みなみが自分の席で落ち込んでいる。

深澤が隣に座り、みなみを見ている。

帰る教師が声をかける。

教師「お先に失礼します」

みなみ、落ち込んだまま

みなみ「お疲れ様でした」

深澤、膝を進めて

深澤「聞いてなかったんでしょ、進藤の両親が別居中だって。仕方ないですよ」

みなみ、深澤を見て

みなみ「深澤先生、去年進藤くんの担任でしたよね、別居のこと、ご存じでした？」

深澤「ええまあ、担任でしたから」

みなみ「私、それ伺いましたっけ？」

深澤「あれー、どうやったかなあ。もしかしてボク言い忘れた？」

みなみ、腹をたてて

みなみ「深澤先生！頼みますよ。私、お母さんにめっちゃ詰められたんですから」

深澤「へー、あのお母さんそんな怖いんですか？」

みなみ「めっちゃ怖いんですよ」

深澤「意外やな。湊はめっちゃ可愛いのに」

みなみ「可愛いですか？」

深澤「僕、めっちゃ好き」

みなみ、怪訝な顔で深澤を見ながら

みなみ「じゃあ相談にのってください。その可愛い進藤くん、高校行きたくないんですって」

深澤 「進藤が？　へえ、そうなんや」

みなみ 「欠席や遅刻も多いですし」

深澤 「ふうん」

みなみ 「心配です、どうアプローチしたら」

深澤 「全くですね。がんばって」

深澤、みなみの肩を叩き席をはずす。

みなみ、深澤を不満そうに見送る。

みなみ 「好きなんちゃうんかい！」

### ○湊のマンション・外観（夜）

### ○湊の家・和室（夜）

和室の布団の上で漫画の単行本を読む湊。

漫画は年季の入ったシリーズもので、

枕元に十数巻積み上げてある。

由夏がふすまを音を立てて開け、湊び

くつとして由夏を見る。

にらみ合う由夏と湊。

枕元の単行本。

× × ×

湊、由夏からクッションなどを投げられ、部屋の中を逃げ回っている。

由夏「そうやって勉強もせんと漫画読んで、あんた楽しみたいだけちゃうんか。どうすんねん。なあ。高校どうすんねん」

湊「やめろ、ばばあ。死ね」

由夏「やめへんし死なへん。あんた、高校も出んどどうやって食べてく気なん？ ずつとあたしのスネかじる気なん？」

湊「おとんとこ行ったらええんやろ」

由夏の動きが止まる。

由夏「おとんとこつてあんた、本気で言ってるの？」

湊「本気やし。どうせおかん、俺のこと邪魔なんやろ！」

由夏「邪魔なんて言うてないやんか」

湊、由夏を和室から追い出しふすまを閉める。



○同・和室・前（夜）

閉められているふすまの前で由夏、叫ぶ。

由夏「邪魔とか一言も言うてないやんか！」

返事が無い。

うなだれる由夏。

○同・ベランダ（夜）

酎ハイの缶を片手にベランダに出る由夏。地上を見下ろす。

○道（夜）

街灯に照らされた道。  
自転車が通り過ぎる。

○由夏の家・ベランダ（夜）

地上を見つめる由夏。  
ため息をついて部屋に入る。

○真の実家・外観（夜）

和風の二戸建て。

○同・居間（夜）

進藤真（42）が夕飯を食べている。

進藤成子（70）が横で見ている。

成子「あんたいつ帰んのよ」

真「今はここが自分の家や」

成子、ため息をついて

成子「子どももおるのに、一人で飛び出してきて。いい加減、由夏さんと話し合いな」

真「は？ アホ言うなよ。向こうが『帰ってきてください』と頭下げるまで絶対帰らんわ、あんな家。誰が虫けらみたいな扱われて黙ってられっかよ」

成子「あんたかて悪いとこあったんやろ」

真「俺が悪いなら世界中のやつ皆悪いわ」

成子「またそういう訳のわからんことを。由

夏さん、しっかりしてるやんか」

真「あいつの味方すんなよ、子どもの俺の味方せえや」

成子「味方したいような子どもちやう」

真、食べているが箸を止めて

真「子どもできんかったら絶対結婚せえへんかったわ。運命の分かれ道やな」

成子、真にみかんを投げて

成子「ほんまあんたはどうしようもない、いつまでも済んだことをグダグダと」

真「ちよつと投げんなよ」

ビールを飲む真。

成子「湊かて『小さい頃の俺にそっくりや』って言ってたやんか」

真「ちよつとアホなところが俺に似てる」

成子「情けない！」

真「もうええって。ちよつと黙って。ビールがまずいわ」

成子ににらまれながら、まずそうにビールをすすする真。

○由夏の家・寝室・内（夜）

ダブルベッドに一人で寝る由夏。

天井を見ている。

○由夏の家・和室・内（夜）

湊が布団に寝ている。湊はLINE画面で「おとん」と書いた画面を開いている。

○真の実家・居間（夜）

居眠りしている真。

側にあるスマホがLINEの着信を知らせる。

画面には湊からの「いつ帰ってくる？」「おかんしんどい」「どこおるん？」「帰ってきてや」と未読メッセージが続々と表示されている。

○湊の中学・二年二組教室・内

休み時間に湊が例の漫画を読んでいる。背後からリサがのぞき込む。  
湊、驚いてリサを見る。

湊 「なに？」

リサ、いたずらっぽく

リサ 「その漫画しよっちゅう読んでない？」

湊、赤くなる。

リサ、湊をのぞき込んで

リサ 「面白いの？」

湊 「まあ」

リサ 「ちよつと見せて」

湊 「いや、ちよつと」

リサ 「いいじゃん、ちよつとだけ」

湊、渋々、本をリサに手渡す。

リサ、パラパラめくり

リサ 「借りてもいい？ これ」

驚く湊。

湊 「あかんて」

リサ 「お願い、貸して。お願い」

他の生徒が二人を見ている。

湊、渋々うなずいて前を向く。

他の生徒たちがこそこそ噂話をしてい  
る。

リサは満足そうに漫画を持っている。  
湊、リサをこっそり見る。

○同・廊下

放課後。鞆を持ったリサを湊がつかまえる。

リサ「なに？」

湊「漫画、いつ返してくれる？」

リサ、意味ありげに湊を見て

リサ「なるだけ早く返すわ。それでええ？」

うなづく湊。

リサ、にっこり笑って帰ろうとする

が、前から深澤が歩いてくるのに気づ

き、顔を曇らせる。

深澤、湊に気づき、

深澤「よ、湊！ 元気か？」

湊、深澤から視線をそらす。

リサ、無言で深澤の横を通り過ぎる。

見送る湊。

深澤は湊を見ている。

○由夏のマンション・外観（夜）

○由夏の家・和室（夜）

湊が漫画を順番に並べている。

途中で巻の順番がとんでいる。

じっと見ている湊。

布団に寝転がり天井を見る。

○同・リビング（朝）

湊が制服を着て出て行く。

テーブルでメイク中の由夏、湊に呼びかける。

由夏「湊。朝ごはんは？」

返事は無く、玄関ドアが開いて閉まる音。

由夏「無視かよ」

○湊の中学・二年二組教室・内（朝）

一人で机で音楽を聴いてるリサ。

湊、リサの目の前に来る。

リサ、顔を上げて湊を見る。

リサ「おはよう。まだ読んでへんで」

湊、漫画を差し出す。

リサ、受け取り

リサ「一卷？」

湊、黙っている。

リサ「一卷から読めってこと？」

湊、うなずいて自分の席に戻る。

リサ、微笑んで漫画を机に入れる。

湊、落ち着かない。

○デイサービス「あおい」・前

宅配の車が停まっている。

高遠の声「あおいさん、お荷物です」

○同・入口

高遠が荷物を持って立っている。

由夏が印鑑を持って奥から出てくる。

由夏「ご苦労様です」



伝票に印鑑を押す。

高遠、じつと由夏を見ている。

高遠 「この間のあれ、ほんま？」

由夏 「この間ののって？」

高遠 「名字」

由夏 「ああ」

高遠 「まだ進藤やな」

由夏 「そう、まだ」

由夏、高遠と視線が合い照れる。

木本が由夏を呼ぶ。

木本 「進藤さん、電話」

由夏 「あ、はい。じゃ」

由夏、行こうとする。

高遠、腕を引っ張って由夏にささやく。  
く。

高遠 「飲みに行こ、今度」

由夏、振り返る。

高遠、ウインクして去る。

由夏、高遠を見送り、にやにやして電話をとりに行く。

○湊の中学校・廊下

人気の無い廊下で深澤と湊が向かい合っている。

湊の顔、強張っている。

深澤「大丈夫か？ 最近、元気してるか？」

湊「はい」

深澤、湊の肩に手を置き、

深澤「そんな他人行儀にすんなよ。俺とおまえの仲やんか」

湊、自分の肩に置かれた深澤の手を見る。

深澤「湊、合唱部戻ってこないか？ 男声足りひんねん」

湊、首を振る。

深澤「大丈夫やて。もう誰もおまえのこといじめたりしんから。な？」

深澤、両手を湊の肩に置く。

湊、廊下の端にリサが立ってこちらを見ているのに気づく。

湊、走ってその場から立ち去る。

深澤「おい、進藤」

見送る深澤。振り返るとリサと目が合う。リサ、背中を向けて立ち去る。

○同・二年二組教室・内

帰り支度をする湊。

リサが側に来る。

湊、顔を上げるが、リサと気づくとうつむく。

リサ、さぐるように

リサ「深澤と仲いいん？」

湊、黙っている。

リサ「何話してたん」

湊「別に、何も話してへん」

リサ「話してたやん、さっき」

湊、強い調子で

湊「関係ないやろ！」

湊、ハツとしてリサを見る。

リサ、怒った顔をして席に戻る。

湊、顔を覆う。

立ち上がってリサのところへ行く。

湊「ごめん。つい。ごめんな」

リサ、にっこりして

リサ「ええよ、こっちこそごめん」

湊「苦手なんや、深澤」

リサ、驚いた顔で

リサ「そうなん？ 嫌いなん？」

湊、うなずいて席に戻る。

リサ、湊を見送り何か考えている。

○同・廊下（夕）

湊、鞆を持ち、帰っている。

深澤が前方からやってくるのを見て立ち止まる。逃げようか迷うそぶり。

後ろからリサが走って来て、湊の手を取り走り出す。

リサ「逃げよう」

二人で深澤の横を駆け抜ける。

驚いて見送る深澤。

みなみが通りかかり、

みなみ「廊下、走らないよ！」

× × ×

手をつないで校内を走るリサと湊。

リサ楽しそう。

湊、リサを見てうれしそう。

○同・校門前（夕）

湊とリサ、息を切らしている。

湊、リサと手をつないだままのことに

気づき、あわてて離す。

リサ、残念そうな顔をする。

湊「じゃあ」

リサ「うん、また」

別々の方向に分かれる二人。

× × ×

湊、歩きながら振り返る。

リサが立ち止まって湊を見ている。

湊、頬を紅潮させて再び、前を向いて

歩く。

○道（夕）

湊、機嫌よく歩いている。

目の前を子どもと手をつないだ30代

夫婦が楽しそうに歩いている。

じつと見る湊。笑顔が消えている。

○由夏の家・リビング（夕）

湊、入ってくる。誰もいないリビング

を見回す。ベランダへ出る窓が開いて

いてカーテンがひらひらしている。

○同・ベランダ（夕）（夜）

湊が夕日に照らされ、ベランダから地

上を眺めている。

× ×

あたりが暗くなっている。

相変わらずベランダから地上を眺めて

いる湊。何かに気づく。

○マンション正面の道（夜）

由夏が自転車に乗ってご機嫌で帰ってくる。

○由夏の家・ベランダ（夜）

湊、地上をじっと見てるが、部屋の中に入り、窓を閉める。

○同・キッチン（夜）

鼻歌を歌いながらご機嫌の由夏。

風呂上がりの湊、通りがかり、じっと

由夏を見る。

由夏、気づき

由夏「なに？」

湊「キモ」

湊、和室に入りふすまを閉める。

○同・和室（夜）

漫画を揃えている湊。

ふとふすま（の向こう）に目をやる。

○同・リビング（夜）

電気が消され、誰もいないリビング。  
窓が開いている。

○同・ベランダ（夜）

由夏が機嫌よく煙草を吸っている。  
地上に目をやり、煙草を片手にじっと  
見ている。

○同・和室（夜）

和室のふすまを閉めると布団に寝転が  
る湊。漫画を読む。が、すぐやめる。  
ため息をつく。

○居酒屋・外観（夜）

○同・店内（夜）

真が佑美と奈津と飲んでいる。

佑美「ねえ、いい加減戻ったら？」



奈津「そうやで。もう戻りなよ」

真「あいつ、何か言ってた？」

佑美「何かって？」

真「俺がいないと寂しいとか、困ってるとか」

佑美と奈津、黙っている。

真「(すねて)ま、俺なんかおらん方がええよな」

仏頂面で酒を飲む真。

佑美「由夏から何か言ってきてないの？」

真「ない」

奈津「家出てから何も？」

真「ゲームの宝箱のありかを聞かれたくらいかな」

顔を見合わせる佑美と奈津。

真「俺なんてどうせいらんのよ」

### ○湊の中学校・階段

階段を降りる湊を深澤が追いかけている。

深澤 「なあ、湊。戻ってこいや、合唱部」  
無言で降りていく湊。

○同・校庭

校舎から校庭に出た湊、合唱部が揃っていることに気づきハッとする。

合唱部、湊を冷たい目で見ろ。

深澤が湊に追いつき、後ろから抱きつく。

深澤 「なあ、湊。いいだろ？」

湊、嫌がって声を絞り出す。

湊 「やめて！」

湊、深澤の手から逃れて逃げていく。

合唱部員、気持ち悪そうな顔をして

合唱部員 A 「うわ、キモ」

合唱部員 B 「女みたいな声」

深澤 「あー、逃げられた。(部員たちに)じ

やあ、練習しようか」

その様子を遠くから見ているリサ。

○同・二年二組教室・内

生徒たちが食べ終わった給食の食器を片付けている。

湊はほとんど手をつけてない食器を前にじっと座っている。

リサが目の前に来る。

リサ「ちよっと手伝って」

リサを見上げる湊。

○同・校庭

合唱部員たちが整列して合唱している。深澤、張り切って指揮をしている。

○同・廊下

リサと湊で残飯入れを運んでいる。

リサ「手伝ってくれてありがとう」

湊「残飯なんか運んでどうするん？」

リサ「使うねん」

湊「使うってSDGsか何か？」

リサ「そう。ええから黙って運んで」

○同・校庭

合唱部のミニコンサートが続いている。指揮をする深澤。校舎の窓から生徒たちがのぞいている。

○同・二年二組教室内

窓に生徒たちが鈴なりになって下を見下ろしている。残飯入れを持ったリサと湊が勢いよく教室に入ってくる。

リサ「どいてどいて！」

悲鳴を上げて道をあける生徒たち。

湊、リサと共に窓際へ駆け寄る。

湊「おい！」

リサ「せーの！」

リサと湊、窓際で残飯入れを持ち上げる。女子生徒の悲鳴が上がる。

○同・校庭

深澤が頭から残飯をかぶっている。  
合唱部の生徒たちが悲鳴をあげて逃げていく。

深澤、信じられないといった顔で自分の身体を見回し、上を見上げる。

○同・二年二組の窓

興奮している顔のリサと青くなっている湊。

○同・校庭

深澤、見上げて

深澤「こらあ！ 何してくれんねん！」

○同・二年二組・内

リサ、湊を見て

リサ「逃げるで」

湊「また？」

リサ「また！」

リサ、湊の手をとって教室を逃げ出す。

× × ×

校庭へ走り出す湊とリサ。

笑顔の二人。

○由夏のマンション・全景

○由夏の家・玄関・外

チャイムの音。

玄関の前に普段着姿のリサ。

ドアが開き、湊が顔を出す。

リサを見て驚く。

湊「なんで？ 自宅謹慎中やろ」

リサ、自分と湊を指し

リサ「一緒一緒」

湊「謹慎してへんやん」

リサ「退屈すぎて」

リサ、ゲーム機をバッグから出し

リサ「ゲームやらん？　（菓子も見せて）食べるもんも持ってきてん」

湊「謹慎中やし、やめとこ。じゃ」

湊が閉めようとしたドアに無理矢理身体を突っ込むリサ。

湊「おい」

家の中に入り込むリサ。

湊もあわてて中へ。

湊の声「おいー。ふざけんな、マジで」

リサの声「ゲームしようや。一回だけ」

湊の声「えー、一回だけやで」

リサの声「一回だけ一回だけ」

○デイサービス「あおい」・休憩室

昼食中の由夏、体調悪そうにしている。

木本「大丈夫？　ストレス？」

由夏「はい。うちのアホが学校でやらかしよって、マジしんどいです」

咳き込む由夏。

木本「大丈夫よ、大物になるってそういう子は」

木本、由夏の額に体温計を当てる。

木本「え」

緊張した声で

木本「進藤さん、熱ある。39度や」

由夏「え？」

木本、由夏から離れて出て行くようじ

エスチャー。

木本「帰って。すぐ帰って」

○由夏の家・リビング

テレビに向かい菓子を食べながらゲ

ムをするリサと湊。

湊「貸した漫画、どこまで読んだん？ 次貸

そうか？」

リサ「まだ読んでへん」

湊「え？ 全然？」

リサ「うん。あんまり漫画好きちゃうねん」

湊、驚いてるが



湊「読まんのなら返して。あれ大事やねん」

リサ「読む。これから読むつもりやってん」

リサ、麦茶をとろうとしこぼす。

リサ「あ、ごめん」

湊、台拭きを持ってくる。

リサ「漫画が大事なん？ 変わってんね」

湊、顔色が変わるが何も言わず、麦茶を拭く。

リサ、湊が台拭きで拭くのをじっと見ている。

湊「なんか珍しい？」

リサ「ううん。(ごまかして)うちの拭くや

つと一緒や」

湊、台拭きを置いてきてゲームを再開しようとする。

リサ「ごめん」

湊、リサを見る。

リサ「めっちゃ怒られたんちがう？」

湊「それはまあ」

リサ「ほんまごめん」

湊、ゲームを置いて

湊「なんであんなことしたん？」

リサ「別に」

湊「まあ、別にええけど」

ゲームを始めようとする湊。

リサ「あたしがアホやねん」

湊、チラツとリサを見て

湊「俺らって基本アホやん。中学生やし」

リサ「いや、そこは一緒にせんといて」

湊「どういう意味」

リサ「私、こう見えても学年10位には入っ

とんねんで。湊くん、ちやうやろ」

湊、唇を噛み、黙る。

リサ「冗談。――あたし、深澤のことめっ

ちや好きやってん」

湊、驚く。

湊「え！？」

リサ「めっちゃ好きやってん、深澤先生」

リサ、うっとりとはく。

湊、信じられないといった顔。

湊「好きであんな残飯かぶせたりする？」

リサ「屈折してんねん」

湊「屈折。いや無いわ」

リサ「だって。私、何回も好きやって言うてん」

湊「え。告白したん？ 深澤先生に？」

リサ、うなずいて

リサ「した」

湊「勇気あるわ」

リサ「せやろ。恋したら何でもしてまうねんなあ。湊くんも恋したらわかるわ」

湊、かすかな怒り。

湊「なんで恋してへん前提やねん」

リサ「え、あるん？」

リサに見つめられて、目をそらす湊。

湊「ないけど」

リサ「ないやん」

湊「深澤、なんて？」

リサ「なにも。(苦笑いの顔を作って) こんな顔してた」

湊「そっか」

リサ「ちゃんと振ってほしかってん。こんなんじゃ全然あきらめられん」

湊、黙っている。

リサ「一言、『俺、おまえのこと女とは見られん』って言うてほしかってん」

湊、吐き捨てるように

湊「そんなこと言うわけないやん」

リサ「なんで」

湊「なんでって先生やし」

リサ「先生は生徒を傷つけへん？」

湊、黙る。リサ、湊を見て

リサ「湊くんはええなあ」

湊、リサを見て

湊「なんで？」

リサ「深澤先生のお気にやん？ 私、ずっと見てたから知ってんねん」

湊、冷たい目でリサを見るとゲームを始める。

リサ「なに？」

湊 「それでか。エゴのかたまりやな」

リサ 「エゴ？ なにがそれでなん？」

湊 「せやから、俺が深澤のお気にやから、俺に近づいたってことやろ？」

リサ、迷っているが

リサ 「正直、最初はそうやった。でも、」

湊 「やっぱり。最低やな。自分さえよければええんか。エゴや。エゴの化け物や」

リサ 「化け物って。ひどいやんか」

湊 「ひどいのはそっちちゃう？ 人を巻き込んで、おかげで出席停止やし。アホみたいや」

リサ、湊を見ているが、湊を叩きだす。

湊 「痛い。痛いって。痛、痛い、ちよ、やめて、マジで痛いって。やめろや！」

リサ、湊をにらむ。

リサ 「最初は、って言うたやん。でも、今は湊くんのこと、」

湊 「そんなん、勝手に思わんといて」

リサ、湊に抱きつく。突き放す湊。

湊「何してん。帰って」

リサ「どうせエゴイストやもん、私」

リサ、下着を脱ぐ。湊、あきれる。

湊「なにしてんの」

リサ「こんなことしたら困るやろ？」

湊「困るっていうか、もうなにしてんの」

リサ「困らせたいねん、私は。誰かを困らせたいねん」

リサ、服を脱ぎだす。

湊、あつけにとられるがソファでうずくまる。リサ、湊を見て

リサ「何してんの？」

玄関でドアノブを回すガチャガチャという音。

リサ、湊、ぎよっとする。

ドアを叩く音。

由夏の声「（具合悪そう）湊、おらんの？」

あわてる湊とリサ。

湊、和室の押し入れにリサを押し込める。リサの服をつかみ、押し入れに投げ込みフスマを閉める。

鍵が開いた音。由夏が具合悪そうにリビングに入ってくる。

湊を見て

由夏「なんや、起きてたん。寝てんのかと思  
った」

湊、取り繕って

湊「早いやん」

由夏「近寄ったらあかん。熱あんねん、コロナかも。キットもらってきたから検査するわ。頭痛い。ベッドの横に薬あるからとつてきて」

湊「わかった」

湊、薬を取りに行く。

由夏、下に落ちていたりリサの下着に気づく。広げて確かめる由夏。

部屋を見回し、コップが2つあるなどに気づく。

あちこち見回し、和室の押し入れに目をやり、凝視する。

薬をとってきた湊、由夏の視線の先に気づきあわてる。

由夏、押し入れに向かう。

湊「おかん？ 薬、持ってきたで」

由夏、押し入れを開け放つ。

服を抱えたリサと目が合う。

由夏「出なさい」

リサ、押し入れから出てくる。

由夏、下着を手渡し

由夏「服着て」

リサ「はい」

湊「あの」

由夏、湊をすごい目でにらむ。

湊、いたたまれない顔でうつむく。

リサ、服を着て

リサ「あの、ごめんなさ」

由夏、リサに向かって手を振り上げる。咄嗟に湊、由夏を止めに入る。



湊「おかん！ やめとけ」

由夏、リサをにらんでいるが手を下ろし、

由夏「帰って」

湊「おかん、ごめん」

由夏、振り返り、湊をひっぱたく。

リサ、由夏にしがみつき

リサ「ごめんなさい、湊くんは悪くないんです。ごめんなさい」

由夏、リサを振りほどき

由夏「帰ってって言ったよ？ 帰って！」

リサ「湊くん、ごめんね」

リサ、玄関へ走っていく。

湊、リサのゲームやカバンなど集め、後を追う。

由夏、肩を怒らせて立っているが、よろよろと倒れ込む。

湊、戻ってきて由夏に気づき

湊「おかん、大丈夫か？」

由夏「向こう行って」

湊「一応言っとくけど、俺、ほんまなんもしてへんで」

由夏「キモい」

湊、由夏を見ているが

湊「ええで別に信じへんなら。おかんはいつもそうや。勝手にしろや」

湊、出て行く。

由夏、ずるずると床に寝ころぶ。

咳き込む。

### ○同・寝室（夜）

マスクしてベッドで寝ている由夏。

辛そうに寝返りを打ち、咳き込む。

枕元のイオン飲料を飲む。

空のペットボトルを床に落とし、目を閉じる由夏。

床に空のペットボトルが散乱している。

ドアが開き、湊がのぞき込む。

新しいイオン飲料を置いていく。

○同・リビング（夜）

湊、電話をかけている。

湊「あ。母親が熱出て辛そうで。熱はさつき  
39・8度でした。はい。どこか病院を紹  
介してもらえませんか。それか、あのホテ  
ルとか。はい」

由夏の咳き込む音。

○同・キッチン（朝）

湊がレトルトのかゆを鍋で温めてい  
る。

○同・寝室（朝）

お盆を持った湊が由夏をじっと見てい  
る。

ベッドでぐったりしている由夏。

呼吸している。

枕元にかゆを置く湊。

○同・リビング

テレビでコロナ関連のニュースをやっている。湊、電話している。

湊 「熱が40度あってすごい辛そうなんですけど。ホテルとか無理ですか？ このまま死んじゃいそうです」

由夏の咳き込み、うなる声。

湊 「お願いします」

× × ×

湊、スマホのLINEを打っている。

「父」のトーク画面。「おかん、コロ

ナ」「苦しんでる」「咳ひどい」「病

院、電話つながらない」「どうしたら

いい？」。未読のまま。電話をかける

湊。しばらく耳をすましているが、がつくりとうなだれ、うなる。

○同・寝室（夜）

由夏、汗だくで目を覚ます。

湊が由夏の顔を見ている。

由夏、追い払うジエスチャー。

由夏「湊。ずっとおったん？」

うなずく湊。

由夏「向こう行き。あんたまでうつるったら困る」

湊、じつとしている。

由夏、追い払おうとしてやめる。

由夏「あかん、しんどい。死ぬ」

湊「病院どこも繋がらへんわ」

由夏「頼むで日本。どうなってんねん。死ぬ」

湊「死ぬ死ぬ言うてたらほんまに死ぬで」

由夏、横を向いて咳き込む。

由夏「湊、私が死んだらうれしいやろ」

湊、黙っている。

由夏「もう怒られんでもすむやん」

湊「そやな」

由夏「否定せんのかい。まあ、ええわ」

湊「おとんに電話した」

由夏、湊を見る。

湊 「行こうか？って言ってる」

由夏 「あかんで、向こうはばあちゃんおるし」

湊 「でも」

由夏 「ええて」

湊 「これで死んだらもう会われへんで」

由夏、湊を見る。

由夏 「死ぬんかな」

玄関のチャイムが鳴る。

由夏と湊、顔を見合わせる。

湊 「おとんかな」

湊、出て行く。由夏、弱々しく

由夏 「入れたらあかんで」

○同・玄関・前

高遠がドアから離れた場所で段ボール箱を持って立っている。

ドアが開き、湊が顔をのぞかせる。

湊 「なんですか」

高遠 「ぼく、由夏さんの同級生で高遠って言うんやけど、息子さん？」

湊 「はい」

高遠、声を潜めて

高遠 「お母さん仕事休んでるやる？」

湊、うなづく。高遠、箱を差し出し、

高遠 「これ、よかったら。もう市の支援物資申し込んでるかもしれないけど、あっても困らんし、もらっておいて」

湊、困った顔で

湊 「いいです」

高遠 「怪しいもんちゃうで。ここ置いておくから。お母さんに高遠が来たって言うておいて。じゃあ」

高遠、去る。

湊、外廊下に置かれた段ボールを見る。

○同・寝室（夜）

由夏、寝入っている。

○同・リビング（夜）

テーブルの上に段ボール箱。

「由夏様 お大事に 高遠」という付箋がついている。

段ボール箱を開ける湊。

たくさんの食料が入っている。

湊、じつと見る。

○同・和室

湊、電話している。

真の声「そうか。お母さん、ようになっ  
てんな。大変やったな」

湊「うん。おとん」

真「ん？」

湊「来てくれんかったな」

真「せやかてコロナやってんやろ？」

○同・キッチン（朝）

由夏、段ボール箱から一つ残っていた



カップ麺を取り出す。

段ボール箱をおがむ由夏。

由夏「高遠くん、ほんまありがとう」

由夏、ふすまの閉まった和室に向き、

おがむ。

由夏「湊！ ありがとうね！」

× × ×

カップ麺が出来上がるのを待つ由夏。

アラームが鳴り、食べようとする。

電話かかってくる。舌打ちして電話に

出る由夏。

真の声「よう。生きてる？」

由夏「なんの用？ ラーメンのびるから早よ

用件言って」

真の声「相変わらずやな。これからのこと、

相談したいんやけど」

由夏、真顔になる。

× × ×

カップ麺を勢いよくすすする由夏。ため

息をついて

由夏「のびきってるやんか」

箸を置いて立ち上がる。

冷蔵庫に貼った高遠からの付箋を見て  
いる由夏。

由夏、和室を振り返る。

ふすまの閉まった和室。

由夏「なあ、湊。この食料持ってきてくれた

高遠さんて人、会ったんやろ」

湊の声「会った」

由夏「どう思った？」

返事はない。

由夏「なあ、湊、看病してくれてありがと

う。もう明日から仕事行けそうやわ。せや  
からあんたも学校行き。もう謹慎とけてる  
んやし」

返事はない。ため息をつく由夏。

○同・リビング

次の日。

仕事へ行く準備をした由夏が和室のふすまの前で立ち止まる。

由夏、目覚まし時計を鳴らし、ふすまの前に置いて出て行く。鳴り続ける時計。ふすま開き、湊の手が出て時計のアラームを止める。

○デイスサービス「あおい」・廊下

由夏が小声で電話している。

佑美の声「ついに」

由夏「ついに。出ていけコール出ました」

佑美の声「引っ越し先は目処ついてるん？」

由夏「全然まだ」

佑美の声「湊くんは？ 看病してくれたんやろ？」

由夏「それが私が治ったら、また口効かなくなってる。反抗期しんどい」

佑美の声「真から話してもらったら」

由夏「ええ？ 電話はしてるみたいやけど」

佑美「やっぱりさあ、男同士の会話って大事  
なんちゃうかな」

由夏、考えている。

○由夏の家・リビング

ソファで寝ている湊。

チャイムの音。二回、三回。

ため息について起きる湊。

○同・玄関・内

ドアスコープをのぞく湊。

ハッとする。

○同・玄関・前

深澤が立っている。

○同・玄関・内

震えてドアスコープをのぞく湊。

深澤の声「湊、そこにおるんやろ？」

びくつとする湊。

○同・リビング

深澤がソファに座っている。

湊、うつむいて立っている。

深澤は微笑んでいる。

深澤「どうしたんや。みなみ先生、心配しとったで」

黙っている湊。深澤、笑って

深澤「学校、出てこいや」

湊、黙っている。

深澤「ん？」

湊「なんで先生が？ 担任ちゃうやん」

深澤「それはまあ、この間のことを湊が気にしてるんちゃうかってな」

深澤、湊に横に座れとジェスチャー。

湊「あのリサは」

深澤「ああ。もう元気に来てんで、学校」

深澤、自分の横をぽんぽんと叩く。

ためらう湊。

深澤、湊の手をひっぱり座らせる。

深澤、湊の肩に手を回し、

深澤「他になんかあるんか？ 学校に出てこれん理由。俺に言うてみい」

湊、身体を硬直させている。

深澤「学校イヤか？」

深澤、湊をじっと見る。

湊「学校じゃなくて」

湊、深澤を見ずに

湊「先生が嫌や」

深澤「なんでそんなこと言うん」

湊「変なことするやんか」

深澤「変なことってこんなことか？」

ソファに湊を押し倒す深澤。

湊「やめて」

深澤「こんな男同士のスキンシップやんか。なあ」

暴れる湊、やつとのことで深澤から逃げ出す。

深澤「湊。前みたいに仲良くしようや」

湊「出てってください」

深澤、苦笑いして

深澤「一年のときは喜んでたやん。俺はわか  
ってるで、湊。おまえ、俺に父親の影を見  
たんやろ。せやから受け止めたる。恥ずか  
しがらんと、こっちこいや」

湊「何言うてるんや、全然違うわ」

湊、キツチンから包丁を持ち出し構え  
る。あわてる深澤。

深澤「待て待て」

湊「出てけや。勝手に俺の気持ち想像すん  
な、キモい」

玄関のチャイムが鳴る。

深澤と湊、玄関の方を見る。

○同・玄関前

真が紙袋を手に立っている。

ドアが開き、深澤が出てくる。

驚く真。

真「どちらさま？」

深澤「あ、ええと？」

真「この家の者ですけど」

深澤「あ、私、湊くんの一年のときの担任の  
深澤と申します。今日は湊くんの様子を見  
に寄らせていただきました」

真「そうでしたか。一年のときの……？ そ  
れはご丁寧にありがとうございます」

そそくさと去る深澤。

真、怪訝そうに見送るが、ドアを開け  
て中に入る。

真「湊？」

× × ×

リビングで湊がソファに顔をうずめて  
いる。真、脇に立ち

真「湊。何してるん」

湊、顔を上げて真を見る。

× × ×

真が湊に話しかける。

真「そうかあ。それはちよつと嫌やな」

湊、信じられないといった顔で

湊「ちよつとやないよ。すごい嫌や」



真「でもなあ、今二年やろ？　あと一年我慢したらもう中学卒業やし、そんな変なヤツとも離れられるやん」

湊、首を振り

湊「もう学校行きたくない」

真「わかった。俺からお母さんに話したるわ」

湊「絶対イヤや」

真「けど」

湊「イヤや。絶対イヤや。おかんには知られたくない」

真、湊を見て

真「わかった」

○同・寝室（夜）

寝室で電話をする由夏

由夏「そうなんや。特に学校になんかあるわけちゃうんやな。そしたら本人の問題か」  
真の声「環境変えてみるのもええかもな」

由夏「引っ越し、ちょっと待って。まだ全然  
物件見てないねん。同じ校区でとなると  
中々」

真の声「俺がいつしよに暮らそうか」

由夏、真顔になる。

由夏「え、ちょ、待って」

真の声「それがええんちゃうかな。微妙な年  
頃やん。中学生って」

由夏「ちょっと。それって、戻りたいってこ  
と？」

真の声「はあ？ そんなわけないやん。湊と  
一緒に暮らすって言ってんの」

由夏「湊があんたと暮らしたいって言うた  
の？」

真の声「うーん、まあ、はっきりとそう言っ  
たわけちゃうけど、男同士、なんか察する  
ものがあって」

思わずスマホを切る由夏。辺りを見回  
す。スマホをベッドの上に放り出す。

○同・和室（夜）

湊、漫画を読んでいる。由夏、ふすまを開けて湊を見る。振り返る湊。

由夏「湊、明日私の仕事についておいで」

湊、怪訝そうな顔。

○デイサービス「あおい」・食堂

昼食の時間。

湊、エプロンをつけて仏頂面で立っている。

湊、由夏に視線をやる。

由夏は利用者の食事介助をしている。

湊はあくびをかみ殺す。

田中時枝（89）が湊のエプロンを引っ張る。

湊、時枝を見る。

ニコニコしている時枝。

由夏、湊が時枝の言葉を聞き取ろうとかがんでいる姿を見て微笑む。

高遠が入口の前に来る。

高遠「あおいさん、お荷物です」

由夏、木本が行こうとするのを制して、

由夏「私、行きます」

× × ×

湊は、笑顔で話す由夏と高遠をちらちら見ている。

由夏が湊を指し示し、高遠が湊に手を振る。湊、目をそらす。

○同・玄関

職員が時枝の乗った車いすを押して出て行く。由夏と湊、見送って

由夏「時枝さん、また水曜日ね！」

湊「あの人、送迎バスじゃないんや」

由夏「近所で一人暮らししてはんねん。でもだんだん認知が進んできてはるし、今後どうしはるやろなあ」

由夏が話している間に湊は玄関に向かう。

由夏、ため息をつき後に続く。

湊、立ち止まり

湊「仲いいん？ あの宅配の人と」

由夏「言うたやろ。同級生」

湊「ふーん」

由夏、湊をちらっと見て中に入る。

湊、由夏の後ろ姿を見ている。

○ラーメン屋・外観（夜）

○同・店内（夜）

カウンターに由夏と湊、並んで座り、  
ラーメンをすすっている。

由夏「おかんの仕事、どうやった？」

湊「どうって。仕事してた」

由夏「まんまやな。もつとないの、こう、お

かんの働く姿見て感動したとか」

湊「楽しそうに働いてて変な感じやった」

由夏「なによそれ」

湊「家帰ってくると疲れ切ってるやん」

由夏「ああ。そういうこと」

湊、ラーメンを食べる。

由夏「たしかに疲れてるかもな」

由夏、ラーメンを食べる。

湊「俺とおると疲れるんちゃう？」

由夏「そんなことない」

湊、考えている。

○同・寝室（夜）

寝ている由夏。咳をする。

ドアが開き、湊が顔を出す。

湊、由夏をじっと見る。

○由夏のマンション・リビング（朝）

漫画を手に持ったまま、ソファで寝入

っている湊。

クッションが飛んで来て湊に当たる。

湊、漫画を落として目を覚ます。

漫画を拾おうとすると、由夏が仁王立ちしている。

由夏「あんたまた学校行かなくなったな」

湊「行くよ」

由夏「毎日毎日古い漫画ばかり読んで飽きひんの」

湊「俺の勝手やろ」

由夏「今度ずる休みしたら漫画全部捨てるからな」

湊「勝手に決めんなや！ 捨てたら殺す、マジで」

由夏「それから、休むんなら手伝いに来なさい」

心底うざいという顔の湊。

### ○田中家・外観

古びた小さい家。

由夏の声「田中さーん。おばあちゃん」

### ○同・玄関前

玄関前にエプロンをつけた由夏と湊が立っている。湊は電話をかけ、由夏は家の中に呼び掛けている。

由夏 「田中さーん」

由夏、玄関ドアに手をかけて開けようとしますが鍵がかかっている。

家の中から電話が鳴る音が聞こえる。

湊 「出ない」

由夏、湊を振り向き

由夏 「部屋で倒れてるのかな。困った。会社から娘さんに連絡してもらおうわ」

由夏、電話をかけて話し出す。

湊、家の周りを見ているが、急にどこかへ行く。

驚いて見送る由夏。

○田中家・裏く田中家の庭

湊、田中家の裏から田中家の庭に入る。



掃き出し窓に向かい、中をのぞき込む。

湊、試しに窓に手をかけると開く。

声をかけながら中に入る。

湊「こんにちは、田中さん」

○田中家・リビング・内

時枝が倒れている。

湊、掃き出し窓を開け、部屋の中に入る。時枝を見つけ、足を止める。

湊「田中さん」

時枝の横をそっと急ぎ足で通り過ぎながら、玄関へ向かう。

ドアを開ける音。

湊の声「おかん、開いた」

由夏、部屋に急いで入ってくる。

湊も後から入ってくる。

由夏、時枝の横に座り、

由夏「田中さん、聞こえますか。進藤です。」

田中さん。（湊に）湊、救急車」

○同・玄関前

救急車が玄関前に横づけされている。

近所の人が遠巻きに見ている。

救急隊が時枝を担架に乗せて運んでいく。

見送る由夏と湊。

由夏「もう一人暮らしは無理やな」

湊、救急車をじっと見ている。

○湊の中学校・校門（朝）

制服姿の湊が中学校を見上げている。

○同・校舎前（朝）

うつろな目で校舎に向かって歩く湊。

周囲の生徒が湊に冷たい視線を向ける。

湊、突然、吐き気をもよおした顔で校舎と違う方向に去る。

○同・校舎裏（朝）

日陰に座り込む湊。人影に気づくとリサが立っている。

× × ×

日陰に横たわる湊。隣に座るリサ。  
リサ、湊に目をやる。湊、眠っている。リサ、湊をじっと見る。

× × ×

湊とリサ、二人、並んで座っている。

湊「アホな話なんやけど」

リサ「うん」

湊「寝てる間におかん、死なへんかなって」

リサ、湊を見る。

リサ「私も同じこと思ってたことある」

湊「ほんま？」

リサ「小学生のときやけどな」

湊「小学生か」

リサ「寝てる間にお父さんとお母さん、死んでしまったらどうしようって」

湊 「俺はちよつと違くて、ちよつと期待して  
るって言うか。目が覚めたらおかん、死ん  
でないかなって。変？」

リサ、湊を見る。

リサ 「なんで？ お母さん嫌いなん？」

湊 「嫌い。うざいねん」

湊、空を見る。

まぶしそうに目を細める。

○ 由夏のマンション（夜）

○ 由夏の家・玄関・前（夜）

家の中から物が壊れる音、由夏の怒鳴  
り声が聞こえる。

○ 同・リビング（夜）

湊が荒れ狂っている。扉という扉を開  
け放し、中のものを外へ放り出して  
いる。由夏が怒鳴る。

由夏 「やめなさいって湊、やめろ！」

湊「どこやったんや」

由夏「何を」

湊「知つとるはずや。俺の漫画どこやったんや」

由夏「あんたがいつまでも漫画ばかり読んでるからやろ。お母さん、言ったよな。今度宿題しないで漫画読んでたら」

湊「どこやったんや！俺の！」

由夏、湊を見る。

由夏「捨ててん、古紙回収に出した」

湊、獣のように吠える。

耳を押さえる由夏。

湊、家を飛び出していく。

由夏、ヘナヘナと座り込む。

### ○真の実家（夜）

### ○同・居間（夜）

真が上着を着て出て行こうとする。テレビを見ていた成子、

成子「どっか行くん？」

真「湊が由夏と喧嘩して家飛び出したらし  
い」

成子「そのうち帰ってくるやろ」

真「尋常じゃない飛び出し方やったって、声  
震えてんねん、あいつ。心配やし、ちよつ  
と行ってくるわ」

成子「ええ〜」

○由夏の家・リビング（夜）

荒れ果てた部屋で由夏が膝を抱えて座  
っている。真が立っている。

真「ええ、あの漫画捨てたん？ おまえ、な  
んちゆう。ひどい親やな」

由夏「せやかて事前に言うてんで、学校行か  
んかったら捨てるって」

真「だからって子どもの大事にしたもの、  
捨てたるなよ。心折れるで、それは。かわ  
いそうに」

由夏、真にクッションをぶつける。

真「反省してへんな。やっぱり俺が引き取るわ、湊」

由夏「イヤや。どうせお義母さんに丸投げするくせに」

真「湊かてその方がいいはずや」

由夏「何がいいんよ！」

由夏、真をにらむ。

由夏「あんたは勝手に私から逃げて、湊まで取り上げる気なん？」

真「湊のためや」

由夏「イヤや。湊は連れていかんといて。

私、何も無くなってしまっやんか」

由夏をじつと見る真。

○コンビニエンスストア・外観（夜）

○同・出入口（夜）

若者がたむろしている。リサが出てきて、周りをちらっと見て足早に去る。

○道（夜）

人気の無い道を急ぎ足で歩くりサ。

湊が前に回り込み、リサ、悲鳴をあげ  
そうになる。

リサ「湊くん」

放心状態の湊。

× × ×

リサと湊、並んで歩いている。

リサ「ひどいね。宝物捨てちゃうなんて」

湊「あの漫画、小学生のとき、お年玉はたい  
て揃えてん。けど、どうしても買えない巻  
があつて、おとんとおかんと、何軒も本屋  
はしごして、やっと揃えてん」

リサ「そうなんや。ええ話やん」

湊「最後の一冊、揃えたときうれしかったな  
あ」

リサ、微笑んでいるがあることに気づ  
く。

リサ「湊くん」

湊、リサを見る。



○リサの家・前（夜）

一戸建て。リサが家から出てくる。

湊に漫画を二冊手渡す。

湊、じつと漫画を見ている。

湊「ありがとう」

リサ「よかった。残ってて。二冊だけやけど。あ、読んだで、ちゃんと」

湊、リサをそっと抱きしめる。

湊「ほんまありがとう」

リサ、うなずいて湊を抱きしめる。

○道（夜）

警察官が歩いてくる。

物陰に隠れてやりすごす湊。

警官が行ってしまっただから、出てくる

湊。あたりを見回している。

× × ×

とぼとぼと歩く湊。

湊、月を見上げる。

○空（夜）

月が出ている。

○道（夜）

月を見上げる湊

○由夏の家・ベランダ（夜）

月を見ている由夏

○道（夜）

住宅街の塀にそって歩く湊。

田中家の裏に来る。

○田中時枝の家・裏（夜）

灯りが消えている。

湊、じっと見ている。

○同・居間（夜）

湊が静かに掃き出し窓を開けて入って  
くる。

○同・外観（正面）（朝）

ヘルパーが玄関先に立っている。

ヘルパー「おはようございます」

○同・玄関・内（朝）

玄関を開けて入ってくるヘルパー。

ヘルパー「田中さん、おはようございます。

夕べはよく眠れましたか？」

ヘルパー、靴を脱いで上がり框を上  
がる。

○同・和室（朝）

時枝が布団で眠っている。

ヘルパー、ふすまを開けながら

ヘルパー「失礼します、オムツ替えさせて  
いただきますね」

ヘルパー、時枝の横に湊が寝ているのに気づく。

ヘルパー、悲鳴を上げる。

○警察署・外観

○警察署・入口

湊が真に付き添われて出てくる。

○駐車場

停車した車の横に由夏が立っている。

真が湊を連れてやってくる。

湊を見つめる由夏。

○車内

運転席に真、助手席に湊。後部座席に

由夏。

三人、黙っている。しばらくして

真「ドライブでもしよか」

○道

走る車。

○車内

黙って車を走らせる真。

何もしゃべらない湊。

外の景色に目をやる由夏。

○道

湖の横を走る車。SUPのボードが並べてあるのが見える。

○湖畔

車が停めてある。

車内に漫画本が二冊。

×

×

×

湊と真が湖に入ってふざけあっているのを眺めている由夏。

楽しそうな二人。

由夏、悩んでいる顔。

× × ×

由夏、湊に呼びかける。

由夏「湊」

湊、振り向かない。

由夏「あんた、もうおとんと暮らしてや」

真、非難する目で由夏を見る。

由夏「おかんにはもう無理や」

湊、黙っている。

由夏、なおも叫ぶ。

由夏「なあ、湊。あんた、その方がええやろ」

真「今ここで言わんでも」

湊「そやな」

湊、振り向く。

湊「ほんならそうさせてもらうわ。今までありがとうごさいました。お元気で」

湊、歩いていく。真、非難めいた目で

由夏を見ている。

× × ×

湊、歩きながら泣いている。

由夏の声「湊！ 待って湊！」

由夏が走ってきて湊の腕を掴む。

湊、由夏を見る。

由夏、泣いた顔にハツとする。

由夏「湊、ごめんな」

湊「知らんし。もう俺に喋りかけんといて」

由夏「湊」

湊「スツキリしたやろ？ なあ？ 俺のこ

と、お荷物やと思ってたもんな？ 俺がい

なくなれば、あの宅配の兄ちゃんトラブラ

ブやもんな」

由夏「それは違う」

湊「俺もせいせいするわ。このまま一緒に住

んでたら、きつと俺」

湊、黙る。

由夏「きつと何？」

湊「ずっと想像してたわ、おかんがコロナで

寝込んでる間、このままおかん死ぬかもな

って。おかんが死んだあとのこと想像して

たわ」

由夏、黙って湊を見ている。

湊「想像して、泣けんねん。俺、いい息子ちやうかったなつて。ごめんつて。死んだおかに謝ってんねん。悪い息子やった、でもたしかに死んだおかんの前にいる俺は、間違いない息子やねん。誰よりも親思いで、誰よりも」

由夏「湊。泣いてくれたんやね、おかんが死んで。ありがとう。うれしいわ」

湊「俺はおかんが死んで初めていい息子になんねん」

湊、歩き出す。由夏、後ろをついていく。

× × ×

湖畔を歩き続ける湊。後ろから由夏。

× × ×

湊と由夏、間を空けて座っている。

由夏「ごめんな。あたしはあんたをずっと育ててたのに、あんたのことよく知らんかつ



た。あんたが何が好きで何を嫌がってるか  
知らなかった」

湊、湖を見ている。

由夏「母親失格やな」

由夏、立ち上がる。

由夏「車に戻るわ」

由夏、湖に目をやりながら元来た道を  
歩き出す。

スマホが鳴動する。

スマホを耳にあてる由夏。

湊の声「おかん」

由夏「湊？ なに？」

湊の声「俺、あんまナスの漬物好きちゃうね  
ん」

由夏「はあ。何よいきなり」

湊の声「おとんと一緒に暮らすってことはば

あちゃんのナスの漬物食べなあかんよな

あ。俺、好きちゃうねんなあ」

由夏「嫌いやったら食べなきゃええんちゃう  
ん。おばあちゃんも許したるで」

湊の声「なあ、俺、ほんまにおとんとこ行つた方がいい？」

由夏、スマホを握りしめる。

由夏「それはあんたが決めることや」

湊の声「おかん、俺の好きなもの知らんって言うしな」

由夏「教えてよ。覚えるから」

湊の声「どうしよっかな。条件によっては教えてやってもええで」

由夏、ニヤツと笑って

由夏「湊、あんたあんまり調子に乗ったらあかんで。もう知らん。あんたの好きなようにしたらええやん」

由夏、湖を見る。

由夏「あんたの生きる世界や。あんたの好きなようにしてな」

× × ×

湊、座ったまま耳に当てていたスマホを下ろす。

まじめくさって

湊 「俺の好きなものは」

湊、湖を見る。

湖が光っている。

目を細める湊。

真が歩いてくるのが見える。

遠くから由夏が湊を見ている。

(終わり)

